

活動報告

院内ポスターを活用した HIV 検査へ繋げる歯科診療

大多和由美¹⁾, 前田 憲昭²⁾, 溝部 潤子³⁾, 的野 慶²⁾,
池野 良⁴⁾, 中川裕美子^{5,6)}, 加藤 真吾⁷⁾

¹⁾ 東京歯科大学口腔健康臨床科学講座, ²⁾ 医療法人社団皓歯会,
³⁾ 神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科, ⁴⁾ 新潟大学大学院, ⁵⁾ 財団法人エイズ予防財団,
⁶⁾ 国立国際医療研究センターエイズ治療研究開発センター,
⁷⁾ 慶応義塾大学医学部微生物・免疫学教室

口腔は免疫状態を映す鏡といわれ、とくに粘膜症状はさまざまな疾患の発見の契機となる。HIV 感染症においても、口腔カンジダ症等が診断の確定のきっかけとなった症例が報告される。しかし、患者が口腔の病変に気付いて医療機関を受診しても、ただちに HIV 感染症の診断に至らず、複数の医療機関での治療を受けた後に、HIV 感染症と診断される例が多い。口腔症状から鑑別診断としての HIV 検査への道筋は、まだまだ臨床の現場には浸透していない。そこで、厚生労働省 HIV 検査相談体制の充実と活用に関する研究班では、開業歯科診療所内に掲示するポスターを製作し、歯科を受診する患者のみならず、歯科診療所に勤務する医療従事者にも、継続的に口腔の粘膜症状がさまざまな疾患、とくに HIV 感染症にも関連が深いことを啓発することとした。本稿ではポスター作成過程の検証を行った。

キーワード：HIV 感染症の早期発見、ポスター、歯科診療所

日本エイズ学会誌 17: 52-56, 2015

はじめに

口腔症状とくに粘膜の変化は、全身の免疫の状態を反映し、しばしば疾患発見の機会を提供する。なかでも、口腔粘膜の白色病変から、カンジダ症が確認され、免疫能の低下が疑われた結果、HIV 感染症が診断された複数症例が本学会でも報告され¹⁾、また、2011 年度に大多和が実施した首都圏エイズ治療拠点病院（神奈川県、東京都）歯科へのアンケート調査でも、6 施設が口腔症状から、合計 12 症例が HIV 感染の確定診断に結び付いたと報告している²⁾。厚生労働省エイズ対策研究事業 HIV 検査相談体制の充実と活用に関する研究班（研究代表者 慶応義塾大学 加藤真吾）では、患者が口腔粘膜の異常に気付いて歯科受診をする場合、あるいは歯科医療従事者が、診察中に口腔粘膜の病変に気付いて、HIV 検査が必要と判断した場合等に、歯科診療室内で患者と、「HIV 感染症の検査」を話題にできる環境作りが必要と考えている。今回は、歯科診療所内に HIV 感染症を主題としたポスターを掲示することで、口腔症状が HIV を含むさまざまな疾患と関連していることを患者に情報提供することにした。さらにこのポスターが、歯科医師のみならず、同じ診療所で働くスタッフが、口腔症状と HIV 感染症の関連に関心を持つことをも目的

としている。現在、地区歯科医師会を通じて歯科診療所に配布を開始しており、この経過は第 26 回日本エイズ学会で発表した³⁾。そこで本稿では、製作時の意図、ポスターの内容、配布方法について考察を行った。

研究の対象と方法

- ① 配布対象：国内の開業歯科診療所
- ② ポスター製作の意図

エイズ治療ブロック拠点病院の内科を受診し、HIV 感染症と診断された患者を対象として、平成 20 年度に前田らが実施したアンケート調査結果⁴⁾によると、HIV に感染しているにもかかわらず、その事実気付いていない期間に、口腔に異常を感じて歯科受診をしていたと回答していた患者が調査対象者 929 名中 403 名 43.4% 存在した。もちろん、その口腔症状の詳細は確認していないので、HIV 感染症に関連した症状か否かは不明ではあるが、HIV に感染しながらも、その感染を自覚できていない期間に歯科診療所と接触していた事実がある。しかし、これらの歯科受診は HIV 感染症の検査を受ける契機とはなっていない。この調査結果⁴⁾から、すでに HIV には感染はしているが、自覚のない状態で、歯科医院内で HIV 感染症の情報と接触できる機会が存在することが明らかになった。

もし歯科医院での HIV に関する情報との接触が、その患者にとって感染の初期であれば、早期発見にも寄与できる可能性もある。とくに、HIV 感染の早期発見は、感染

著者連絡先：前田憲昭（〒530-0017 大阪市北区角田町 8-47 阪急
グランドビル 22F 医療法人社団皓歯会）

2014 年 2 月 27 日受付；2014 年 10 月 17 日受理

している本人へ治療の早期提供とともに、感染拡大の阻止につながる事が明らかにされている⁵⁾ので、国内のエイズ対策においても重要な役割を分担できる可能性が存在する。

なお、情報提供には、HIV感染のリスクを意識している患者と、リスクを意識していない患者の2群を念頭に置く必要がある。すなわち、HIV感染のリスクを意識していない患者には、口腔症状がHIV感染症を含めた多彩な疾患との鑑別診断が必要とされていることを、一方、HIV感染のリスクを意識している患者には、口腔症状がHIVスクリーニング検査の必要性を示していることを、情報として提供したい。

そこで、歯科受診機会を活用する方法として、常設的で、視覚的に容易に把握され、患者に短時間で認識できる媒体が望ましい。加えて、医療従事者にも、持続的に啓発的であることが望ましく、ポスターはこれに適している媒体と考えられた。

③ ポスター図案の検討

口腔粘膜所見をポスターの主題として、部位、色の変化を組み合わせて候補を作成した。また、症状を「写真」「言葉」で表現することについても検討した。そのなかで、白色病変では、カンジダ症、白板症、扁平上皮癌が、紫色病変ではカポジ肉腫、血腫、血管腫が候補となった。なお、口腔症状として黄色病変、例として口腔粘膜アフター、脂肪腫、も存在するが候補にはならなかった。

④ 配布方法とサイズの考案

配布方法：歯科医院に配布するには、各医院の住所の管理も含めて、地域歯科医師会に依頼して、会員に配布する定期郵便物に添付することが、経済的かつ確実と考えた。この郵便物からもポスターの大きさを決める因子が加味された。なお、歯科医師会に組織されない歯科医院も存在するが、それらの施設を対象とするには住所情報の管理等、地方自治体の協力が必要であり、今回は配布対象外とした。

⑤ 手引書の作成

HIV感染症における検査機関受診への導線に、歯科受診が関連づけられることは、一般国民はもちろん、歯科医療従事者にも、ほとんど知られていない。したがって、われわれの経験に照らしても、歯科診療の現場で、HIV感染の検査・相談に関する提案を患者に行うには、歯科医療従事者にとって、必要な作業ではあることは理解されると思われるものの、戸惑いと精神的負担が大きい。いい換えると、患者のリスクが低いにもかかわらず検査を勧めたところ、結果が陰性であった場合、患者に感謝されることはなく、むしろおせっかいと解され患者を失う場合も危惧される。したがって、これらの作業を、円滑に行い、日常診

療に導入するには、HIV検査相談体制の充実と活用に関する研究班（研究代表者 加藤真吾）が作成している研修ガイドライン⁶⁾、あるいは中四国エイズセンターが作成した「初めてでもできるHIV検査の勧め方 告知の仕方」⁷⁾を参考にすることが望ましい。ただ、歯科医療従事者が容易にこれらの資料と接触することは困難で、ポスターのみの配布では活用に無理や困難が予想され、活用する方法を説明する印刷物が必要と考えられた。

結 果

ポスター図案：口腔症状の利点を踏まえて、口腔粘膜の色の変化を写真で表現することを主題として選択した（図1）。選ばれた所見（色の変化）は、日本国内で、HIV感染の発見の契機となることが最も数多く報告されているカンジダ症（白色病変）と、国内では稀ではあるが、歯科医療従事者には特に注意を呼びかける目的で、カポジ肉腫（紫色病変）を選択した。

部位として、患者自身も容易に観察でき、その変化に気づいて受診することの多い、上下顎歯肉の唇側および頬側、あるいは舌（腹側および背側）、口蓋部を選択した。



図1 研究班で作成したポスター

ポスターの配布対象：配布対象は開業している歯科医院とし、平成 23 年度に広島県歯科医師会、平成 24 年度には神奈川県歯科医師会、平成 25 年度は愛知県歯科医師会でポスターが配布された。広島県歯科医師会（会員数 1,591 名）で製作部数はポスター 3,500 部、手引書 1,600 部、神奈川県歯科医師会（会員 3,853 名）でポスター 8,000 部、手引書 4,000 部、愛知県歯科医師会（会員 3,600 名）ではポスター 8,000 部、手引書 4,000 部を製作した。配布は、それぞれ歯科医師会の定常配布印刷物に、ポスター 2 部と活用説明書 1 部が同封された。

研究班からの配布が容易に受諾された背景には、広島県ではエイズ治療中核拠点病院である広島大学病院が、広島県歯科医師会と HIV 感染者の歯科診療ネットワーク構築事業を実施していたこと、神奈川県は平成 18 年度から HIV 感染者歯科診療ネットワーク事業を実施していたことによる。愛知県はブロック中核拠点病院と歯科医師会の熱心な活動の結果、配布が実施された。

ポスターのサイズ：地域歯科医師会の広報の郵送に使用される通常の封筒は A4 の大きさであり、基本的には、ポスターを A4 の大きさとした。しかし、神奈川県歯科医師

会は、A3 を希望され、A4 の封筒には二つ折りにして封入した。二つ折り、および袋詰めには、別途費用が加算された。

手引書の作成：ポスターを利用する説明書（手引書）を添付することで、歯科診療所の役割を解説した（図 2、3）

考 察

歯科医療機関から保健所へ、HIV 検査のみを目的として患者を紹介することは困難である。それは保健所の検査が HIV に限定されるからである。すなわち、口腔所見から、HIV を絞り込んだ形で検査機関を紹介することは難しい。むしろ、近くの拠点病院へ、鑑別診断のひとつとして HIV 感染の検査を依頼するほうが、歯科医師には行動しやすいと考えられる。ところで、白阪、桜井は検査のあり方のなかで、検査に至った過程を 5 つに分類している。①強要検査、②強制（義務的）検査、③ノリで検査、④無断検査、⑤自主検査でそれぞれに陽性告知における問題点を説明している⁸⁾。われわれが推進するポスターが歯科受診者に啓発するのは、⑤の自主検査であり、一方、口腔症状から歯科医師が拠点病院へ検査受診を勧めることは、医

広島県歯科医師会会員の皆様へ

ポスターのご利用方法

～ポスターをご活用いただくために～

ポスター配布の背景

- 世界的に HIV 感染症予防の努力が徐々に進んでいるにもかかわらず、先進国を自負する日本では、HIV 感染者数が増加を続けています。
- HIV 感染症は、早期の発見で適切な治療を受けることができ、より良い予後が期待できます。また、早期の発見によって、パートナーへの感染防止が可能で、感染拡大を防止できます。いまま、HIV 感染症は不治の病ではなく、感染症とならざる慢性疾患です。
- HIV 感染症の生涯医療費は 1 億円とも思われ、感染拡大を防止することは、国民の負担を軽減することに繋がります。
- 米国では HIV に感染している人の 70% は感染を自覚しており、30% が感染していることを知らないと言われています。一方、日本国内では、自分が HIV に感染していることを自覚している人は、感染者の 30% で、残りの 70% は自覚していないと想定されています。
- 歯科受診で HIV 感染が明らかになる症例が、毎年、報告されています。そういった人々は、HIV 感染症が明らかになる前に、感染を自覚しないまま、複数回、歯科医療機関を受診しています。

ポスターの目的

- 1 受付・待合室にポスターを掲示することで、患者さんに、表示されている疾患や感染症についてそれとなく申し込んでもらう。
- 2 医療従事者や受診者（患者さん）が、ポスターに記載されている病名を認識しても、患者さんが突如な感じを受けない環境をつくる。
- 3 口腔の異常を認じて、何故だろうと考える歯科を受診している方へのアドバイス。
- 4 歯科が全身の疾患と関わっていることをアピール。
【口腔は全身の免疫状態を映す鏡】
- 5 HIV 感染が歯科で発見されている事実を、歯科医師にも患者さんにも知っていただく。
- 6 ポスターに似た症状を確認した場合、患者さんが自覚している場合は、
→ 鑑別すべき複数の病名を明けて専門機関への受診を勧める。

患者さんの家族が別の主治で、鑑別に患部のない場合は、
→ 【受付に貼ってあるポスターに気がつきませんか?】と医師を提供する。
そのあとで、手元に準備したポスターをご覧いただく。
このために、各診療所にポスターを 2 枚ずつ配布しています。

図 2 ポスター利用の説明書（手引表面）

HIV 感染症等、他の病気が疑われる受診者への対応

- 1 地域歯科医師会の活動、
例えば、歯科医師会の「がん検診」への紹介
- 2 連携している病院歯科への紹介
- 3 保健所等で実施している HIV 無料検査への紹介
- 4 HIV 感染症の医療に関わる病院への紹介

お問い合わせ・連絡先

厚生労働省科学研究費補助金エイズ対策研究事業

HIV 検査相談体制の充実と活用に関する研究
研究代表者 立藤典吉 | 歯科受診者に対する検査相談機会の検討
研究分担者 前田憲昭

医療法人社団歯徳会 大阪府北区角田町 8-47 阪急フランドルビル 22 階
前田 憲昭

System 広島県システム

広島県 HIV 感染症の医療体制

ブロック拠点病院 中国・四国ブロック
広島大学病院、広島県立病院、広島市立病院

都道府県単位の
広島県中核拠点病院
広島県立病院、広島市立病院

国立病院機構
呉医療センター

国立病院機構
福山医療センター

※HIV 感染症の兆候に関わる病院への連絡先は、広島県のホームページをご参照下さい。
<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki/57/1168559191169.html>

図 3 ポスター利用の説明書（手引裏面）

療すなわち治療としての検査である。したがって、ポスターには2つの働きかけが期待される。しかし、検査を受けるか否かは、あくまでも患者自身の選択による。この問題に関して参考ができるのは米国 CDC の HIV 検査に関する報告で、米国内で opt-out で HIV 検査を進めるにあっても、進め方の基本は、①患者自身の前向きな姿勢と、②強要されないこと、としている⁹⁾。そして、検査を進めるには、B 型肝炎など複数の疾患の検査のひとつとして実施すること、さらに、検査の説明をして、かりに患者が否定的であっても実施する前提に、その医療施設を訪れるすべての患者に HIV を含めた検査が必要であることを周知徹底させると記載している⁷⁾。これにより、その施設に勤務する医療従事者が、HIV を含む検査を勧めるときの Stigma から解放されるとも説明している⁹⁾。

ところで、口腔病変の確認は非侵襲性であり、特別な機器を準備する必要がなく、染色等の特別な薬品や試薬を必要としない。したがって、患者の身体的かつ経済的負担が少ないか、あるいは皆無に等しく、加えて診療側にとっても負担が軽い。このことは、歯科診療が、さまざまな疾患のスクリーニング機能を果たすとする、米国口腔診断学会 American Academy of Oral Medicine (以下 AAOM と略す) のホームページに現わされている主張¹⁰⁾ と一致する。さらに日本国内でも、千葉県歯科医師会が全国に先駆けて、口腔症状から口腔がんの早期発見システムを立ち上げたこと¹¹⁾ も、口腔診査の有用性を示しており、今回のポスター作成の意図と一致している。歯科医療従事者が、口腔粘膜の変化に注目していることは、今回のポスター配布と方向性が一致していると考えている。

今後は、ポスターを全国の歯科診療所(日本歯科医師会会員数約 68,000 人)に配布することを目標とするほか、歯科医療従事者を養成する機関、すなわち歯科衛生士教育機関、歯科技工士教育機関にも配布して、勤務に先立ち、歯科診療所が果たしている役割を認知していただく予定である。

本研究は平成 23 年度、平成 24 年度、平成 25 年度厚生労働省エイズ対策研究事業補助金 HIV 検査相談体制の充

実と活用に関する研究 研究代表者 加藤真吾の研究費で実施された。

文 献

- 1) 宇佐美雄司, 菱田純代, 横幕能行: 「いきなりエイズ」事例における口腔症状の検討. 日本エイズ学会誌 13: 354, O7-035, 2011.
- 2) 大多和由美, 千葉緑, 池田正一, 前田憲昭: 東京都および神奈川県エイズ拠点病院歯科治療に関するアンケート調査. 日本エイズ学会誌 14: 354, 2012.
- 3) 前田憲昭, 加藤慎吾, 的野慶, 溝部潤子, 中川裕美子, 池野良: 院内ポスターを活用した検査に繋げる歯科診療. 日本エイズ学会誌 14: 459, 2012.
- 4) 平成 20 年度 HIV 感染症の医療体制整備に関する研究班総括・分担報告書(研究代表者山本正弘) 歯科の医療体制整備(分担研究者 前田憲昭). 2009.
- 5) 鯉淵智彦, 白阪琢磨: 抗 HIV 治療ガイドライン 平成 24 年度厚生労働省エイズ対策研究事業 HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究班. p.15, 2013.
- 6) 矢永由里子: HIV 検査相談研修ガイドライン基礎編～実践基礎編 ダイジェスト版.
- 7) 喜花伸子, 藤井輝久, 鍵浦文子, 濱本京子, 木村昭郎, 高田昇: 初めてでもできる HIV 検査の勧め方 告知の仕方, Ver. 3, HIV 感染症の医療体制整備に関する研究班 中国四国ブロック. 2011.
- 8) 白阪琢磨, 桜井健司: HIV 検査相談 要確認 陽性告知のポイント, 厚生労働省科学研究費補助金エイズ対策研究事業「HIV 感染症及び合併症の課題を克服する」研究班, 「HIV 検査相談所における陽性告知からその後の当事者支援に関する研究」. 2012.
- 9) MMWR Recommendations and Reports Revised: Recommendations for HIV Testing of adults, adolescents, and pregnant women in health-care settings, 55 (RR14): 1-17, 2006.
- 10) 米国口腔診断学会 HP: <http://www.aaom.com/>
- 11) 千葉県歯科医師会 HP: <http://www.cda.or.jp/health/cancer>

Poster Presentations in Dental Clinic Are Intended to Promote the Patients to Get the HIV Screening Test for Early Identification of Infection

Yumi OHTAWA¹⁾, Noriaki MAEDA²⁾, Junko MIZOBE³⁾, Kei MATONO²⁾,
Ryo IKENO⁴⁾, Yumiko NAKAGAWA^{5,6)} and Shingo KATO⁷⁾

¹⁾ Tokyo Dental College, ²⁾ Koshikai Dental Clinics, ³⁾ Kobe Tokiwa University,
⁴⁾ Niigata University Graduated School, ⁵⁾ Japan Foundation for AIDS Prevention,
⁶⁾ National Hospital for Global Health and Medicine, ⁷⁾ Keio University Medical School

The poster presentations in dental clinics are intended to promote the patients for getting HIV test. Because oral manifestations are easy to be seen by the patients themselves and to be observed by dentists, especially white lesions on the mucous membranes should be defined by the differential diagnosis including HIV infection. The project team made a model type of the poster and delivered them to the dental clinics at the Hiroshima and Kanagawa districts by co-operations with Hiroshima dental association and Kanagawa dental association. In this paper, we would like to discuss the difficult process for the dentist to explain the necessities and benefits to get the HIV test.

Key words : early identification of HIV infection, poster presentation, dental clinic